地域づくりステップアップ研修会報告

都市と農村が交流する意義

～六次産業という視点で何ができるか～

1月20日（金）に地域づくりステップアップ研修会を開催しました。地域づくりの第一線で活躍している皆さんの更なるステップアップを目的として毎年開催しています。今回は交流活動をテーマに、全国各地で「ムラ」と「マチ」を繋げる事業をプロデュースしている養父信夫氏を講師にお迎えし、近年、町内においても盛んになってきた「都市農村交流（＝グリーンツーリズム）」の基礎を学びました。

グリーンツーリズムの取り組みを始める場合、まず、地元でワークショップなどを行い、地域の資源を洗い出したうえで、モニターツアーを繰り返し実施していくことが必要だといわれています。専門誌やホームページなどを活用し、情報発信力を高めることも欠かせません。

今年から本格的に体験交流を始動する「有田地区グリーンツーリズム研究会」や西友枝「ゆいきらら」、それらを支える地域づくり団体の皆さんに注目が集まっています。

講演概要

養父信夫さん

「九州のムラへ行こう」編集長
九州のムラたび応援団 団長
福岡県宗像分大島村、玄海町（現宗像市）で幼少を過ごす。

グリーンツーリズムのメッカ安心院

グリーンツーリズム発祥の地は、大分県の安心院町（現宇佐市）と言われています。中山間地域に次々と公共施設が建設されていた時代、過疎化が深刻化する現実に「単に施設が増えてもそれだけでは活性化には結びつかない」という危機感を持って立ち上がったのは、地域住民でした。行政からの支援はずっと後からのことです。

リーダーはブドウ農家で、漁村出身の余所者でしたが、農業を活かした全町的なまちづくりを提唱し「安心院グリーンツーリズム研究会」を発足させたのが始まりです。民泊を主としてグリーンツーリズムを展開し、当初3，000円でスタートした体験料は、6．000円まで価値が高まっています。受入は一家庭に一組、2日間にわたっておもてなしをするため、決して儲かるものではありませんが、今から約20年前、取り組みを始めて3年のおばあちゃんが「体験に来てくれる人たちから元気をもらった」とコメントするなど、確実に生きがいづくりに繋がっています。さらに、地域全体で捉えると、民泊参加者一人につき10，000円の経済効果があると言われており、町の活性化に大きく貢献しているといえます。

本質は、単なる観光の受け皿になるのではない

民泊に比べ、農家レストランは交流時間も短く、「交流疲れ」が多くなりつつある中、盛り上がりをみせています。ヨーロッパのある小さな村を視察した当時の安心院町職員は、「800人程度の小さなムラが、なぜかとても元気だ」という現実を目の当たりにしました。20軒ほどの民泊があり、それぞれの家庭でつくるワインが人気を博し、次々と人が集まってくるのです。一次産品から二次加工品を生み出し、それを適正な価格で買ってもらうことが大切だということを教えられるものでした。

一次産業を守るための六次産業※なのである

安心院の松本イモリ谷は大豆で火がついた集落です。素材にこだわった豆腐を作ったところ、大分市内の会社で販売されるなど飛躍的に成長しました。イモリ谷集落から販売店店長が抜擢されたため、毎朝、大分市まで通勤しています。集落はこれを機に、集会所に集めた農産物を積み込み、出荷しています。売上好調の背景には、市場の動向を予測し、出荷量調整などのマーケティングを始めた 70歳のおじいさんの存在があり、購入してくれる方のリスト化で常連客も100人以上。新規就農希望者も10人ほど現れましたが、農業を断念し、地元の納豆などの製造所に雇用されています。また、全国に先駆け、集落営農組織をいち早く立ち上げたことでも有名であり、こうした取り組みが総合的に評価され、イモリ谷は「全国むらづくりコンテスト」で天皇賞を受賞しました。

※六次産業とは、農業や水産業などの第一次産業が 食品加工（第二次）・流通販売（第三次）にも業務展開している経営形態を表す造語。

暮らしにふれるたびであり、本物にふれること

「ムラたび」は心の交流、ムラの物語にふれる旅です。風景、風情、風格、風俗、風味、風習、そして中心に風土。これら7つの固有の風を感じる旅にすることが大切です。地域にとっては、資源の再発見につながるため「地元学」と呼んでいます。「余所の視点を借りましょう」という意識で、地域の「あるもの探し（プラスのあるもの、マイナスのあるもの）」を行うことが醍醐味なのです。

初めての民泊参加者でも、農産物の収穫体験をはじめ、パン作り、五右衛門風呂、蚊帳などを体験するうちに、次第に盛り上がっていきます。特に孤食（個食）が多い都会人は、田舎の美味しい料理が出てくると一挙に盛り上がります。また、「星がきれいだから見にいきたい」という希望に応えて、軽トラックの荷台に乗せ、夜の田畑へ連れ出したところ、都会にはないプラネタリウムのような空間に感動して泣きだしたという話があります。こうした参加者のつぶやきを聞き逃さないのがポイントです。